



企業の人づくりと、地域の森づくり。
その両方が、ひとつの取組で動き出す。

あなたの地域の 森で何が できるだろう？

森林空間利用を
“企業とつながる事業”にしていくための実践ガイド



はじめに

森林は、空気や水を育み、災害を防ぎ、保健・レクリエーションの場を提供するなど様々な恩恵をもたらしてくれます。林野庁では、山村地域の活性化を図るため、こういった森林の生態系サービスの提供・活用により、人と森林の関係を深めるとともに、林業と相まって森林所有者に利益を生み出し、豊かな森林づくりにつなげる「森業(もりぎょう)」の推進に取り組んでいます。

近年、人的資本経営や社員のウェルビーイングへの関心が高まる中、豊かな森林空間を活用した体験プログラム(森のプログラム)を社員研修などに活用する企業が増えています。このような企業等のニーズを捉え、森のプログラムを展開することは、山村地域の活性化につながる事が期待できます。

本冊子では、企業を対象としたプログラムを展開している各地域での体制づくりや企業向けプログラムを構築するまでの流れなどを紹介しています。「自分たちの地域では何ができるのか」「企業とどのような連携が考えられるのか」を具体的に思い描き、次の一歩へとつなげていただけることを期待しています。

はじめに/目次	2
森業の推進	3
導入のメリットと考え方	
企業連携について	4-5
各地の森林空間利用の取組紹介	6-17
上山市/長野原町/南丹市/西栗倉村/安芸太田町	
森のプログラムづくりの考え方	18
これからの森業	19

「森業(もりぎょう)」の推進

近年、都市住民や企業からの森林への関心の高まりから、森林を通じて地域と人・企業がつながる機会が増えています。森業(もりぎょう)とは、森林が持つレクリエーションや環境保全といった多様な価値を活用して、都市部の人や企業を呼び込み、地域の活性化や豊かな森林づくりにつなげる取組です。



森業には、森林と人や地域をつなぐ様々な取組が含まれます。その中の一つが、森林空間を活用して様々な体験プログラムを提供する「森林サービス産業」です。

森を“多面的に活かす”ための考え方

森林空間利用は、高付加価値のサービスとして収益化することで、森林や地域を持続的に維持していく手段となります。高付加価値サービスとは、幅広い年齢層やライフステージにおいて、仕事や学びといったワークの場面から、暮らしや余暇といったライフの場面まで、森林空間を活用することで生まれるものです。その鍵となるのは、地域にすでにあるサービスや既存事業といった様々な活動を、森を舞台にどう組み合わせ、新たな価値を生み出していくかという視点です。



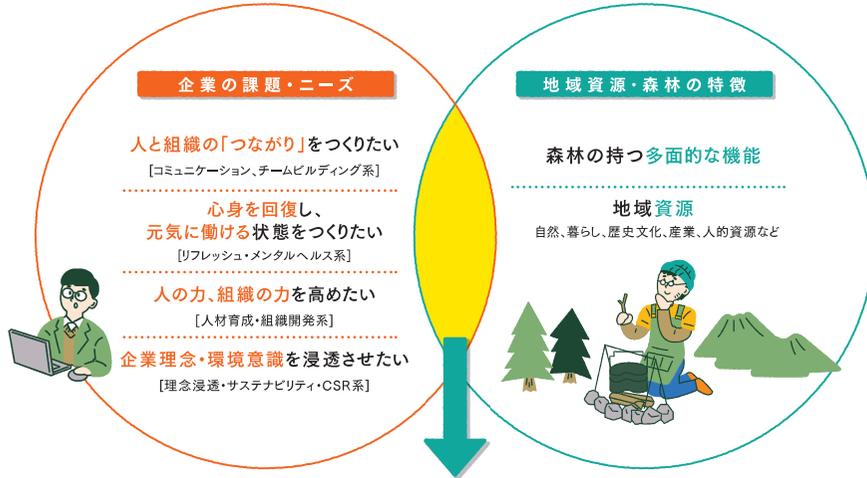
森林空間利用に取り組むメリット

地域の担当者の声	<p>山林管理から、開かれた事業へ 岡山県 西栗倉村</p> <p>「村内で完結しがちだった山林管理が、地域外や異分野とつながる“開かれた事業”へと広がりました。これからの山づくりには、こうした広い視野と外とのつながりが欠かせないと感じています。」</p>
	<p>地域の森で、人と人のつながりが生まれる 広島県 安芸太田町</p> <p>「企業が社員の健康や関係性を真剣に考える姿勢に触れることで、多くの学びと刺激を得ています。森林を通じた『地域と企業』、『人と人』との出会いとつながりを、これからも大切にしていきたいと思っています。」</p>
	<p>効率化の先にある課題に、地域ができること 山形県 上山市</p> <p>「効率化やスピードが求められる今の社会だからこそ、『非効率な時間』を価値として提供できる森のプログラムには可能性があります。参加者が笑顔で帰り、人を大切にす企業とつながれることは、この分野ならではの成果です。」</p>

森林空間利用が生み出す価値

価値は“企業課題×地域の森林空間”の接点で生まれる

健康・教育・観光など、森林と異分野との連携により新たなサービスが生まれています。
特に、森林空間利用に新たな可能性をもたらしているのが、企業の課題と森林空間をつなぐ取組です。



- 価値を生み出すヒントは 編集力**
- 01 既存のサービスや資源を活かし、地域ならではの特色やストーリーを生み出すことで、企業にとっても「こでしか得られない体験」へとつながります。
 - 02 平日の企業・学校向けサービスと、休日の一般向けサービスを連動させることで、利用の幅が広がり、継続利用や雇用創出にもつながります。例えば、地域の子供向け活動には、対話力や創造性、主体性を育む要素が多く、企業の人材育成にも応用できる可能性があります。
 - 03 地域にとって当たり前の営みや、日々向き合っている課題そのものが、企業にとっては学びや気づきを生む価値になる場合もあります。

POINT

森林空間を活かしたサービスの提供では、
地域の中にある多様な活動や資源を複合的に組み合わせていくことが大切です。
そうすることで、事業は単発の「点」ではなく、広がりのある「面」へと育っていきます。

森が、企業の力に

森を通じてつながることで、企業も地域も活性化する

企業と連携するメリット

地域

企業との連携は、地域に新たな収益機会を生み、持続可能な森林管理や人材育成につながります。
また、観光とは異なる関係人口が生まれ、継続的な関係づくりへと発展していきます。

企業

SDGsへの取組の必要性やVUCAといった不確実性の高い時代への対応という観点から、企業では自律的で共創的な人材・組織づくりが求められています。会議室での研修では変革につながりにくいという背景から、森林という非日常の場を活用した企業研修が目まぐるしく注目を集めています。
企業による森林空間利用は、人材育成と地域・環境への貢献を同時に実現する、新しい森の活用方法です。

企業が森を選ぶ理由

森林という日常から切り離された自然環境は、
肩書きや役割を一度リセットし、自分や他者と向き合うきっかけを生み出します。
五感を使った体験や対話を通じて、
主体性や関係性の変化が起こりやすく、組織の学びや気づきにつながります。



森で行う研修に期待される効果

企業の抱える課題	自然環境・プログラムの特徴	期待される効果
<ul style="list-style-type: none"> ・世代間ギャップ、限定的な人間関係 ・コミュニケーションの希薄化 ・ストレス対処、メンタルヘルスへの意識 	<ul style="list-style-type: none"> 組織・業務から離れた非日常の自然環境 ありのままの自分が出やすい自然環境での五感体験 	<ul style="list-style-type: none"> 自由で本質的な対話を行えるフラットな関係性の構築 主体性の涵養によるコミュニケーションの活性化
<ul style="list-style-type: none"> ・自律性、他者との協力意識の構築 ・考える力、創造性の低下 	<ul style="list-style-type: none"> ストレッチゾーンに導く自律的でVUCAな自然環境 総合的で多様性を有する自然に対峙した体験活動 	<ul style="list-style-type: none"> 挑戦心や協力意識の醸成による自律性・リーダーシップの醸成 視点・思考の転換による創造性の涵養、意識変革の促進
<ul style="list-style-type: none"> ・自己理解、他者理解の不足 ・自社事業への理解、エンゲージメント向上 	<ul style="list-style-type: none"> 自然や体験をメタファーにした深い内省・対話 身体感覚記憶・情動記憶を伴う自然環境での共通体験 	<ul style="list-style-type: none"> 自己・他者認識や判断力等の醸成による共創性の涵養、チームビルディング 想起性・学習定着率の向上による行動変容・組織変革の促進

動画「企業×森のプログラム」をチェック!



企業における森のプログラム活用事例集はこちら



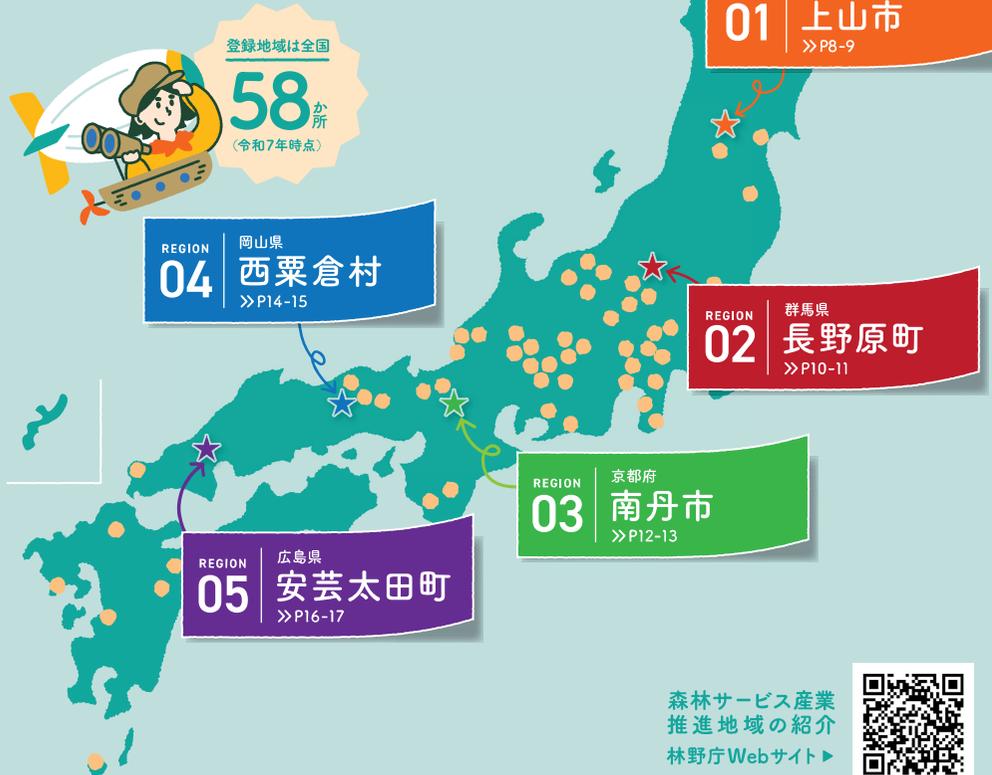
POINT

地域にある自然、多様な資源は、
企業が抱える課題に応える力を持っています。
実際に、地域の特性に合わせた形で、企業と地域の連携の可能性は広がっています。

各地の森林空間利用の取組の紹介

全国各地で、
それぞれの森林空間を
活用した取組が
生まれています

地域資源も、始まり方も、進み方も、
かたちは一つではありません



※森林空間利用に取り組んでいる地域を「森林サービス産業推進地域」として登録し推進しています。

うちの地域では何ができるだろう？



Q1

担い手が少なくても、
行政だけでも始められる？

森林空間を活用したサービスは、どこから始められるのだろうか

Q2

企業とつながるなんて、
ハードルが高いのでは？

この地域の森は、誰のどんな課題に応えられるだろうか



Q3

他の地域と同じテーマに
なってしまわない？

私たちは、何を守り、何を变えたいのだろうか

Q4

特別な森林や、
有名な観光地がなくても、できる？

魅力や価値っていったい何だろうか



Q5

単発の取組で
終わっていないだろうか？

今の事業は、点ではなく面になっているだろうか

答えを出す必要はありません。問いを持ったまま、次のページをめくってみてください。

REGION 01

地域の多様な魅力に 触れながら、 心と身体をリカバリー

— 非日常の高原空間で過ごす、整う時間 —



山形県 上山市 (蔵王高原坊平)

蔵王高原坊平は蔵王連峰西側、標高約1,000mに位置し、天然林を中心とした森林に囲まれている。首都圏から新幹線と自動車を利用して約3時間の距離にあり、スキーや観光、スポーツ合宿利用の拠点となっている。



《推進地域紹介シート》

提供している企業向け森のプログラム

- 五感を解放する森林浴
- クアオルト®健康ウォーキング
- 姿勢矯正ストレッチ
- スポーツ鬼ごっこ など



《森ヨガ》



《プロジェクトラーニングツリー(環境学習)》

実施主体

蔵王坊平観光協議会

営業、プログラムの企画立案から当日の進行までを一貫して担っている。

上山市

森林利用に関する許認可取得、企業対応の窓口、企業訪問の同行など、信頼性と継続性を支える役割を果たす。

なぜ、森林空間利用の取組が始まったのか？

観光や夏季スポーツ合宿といった季節限定の利用から通年型の地域づくりを模索する中、坊平の森林環境や人の強みと、上山市が推進してきたクアオルト®に着目。地域資源と企業の健康経営ニーズを結びつける取組が始まった。

取組の最初の一步



✓ 先進地の視察

長野県信濃町や小海町を訪問。地域の可能性を見つめ直すとともに、関係者の中で目指すビジョンを共有し、話し合いを重ねた。



✓ ハード整備

既存遊歩道を活用した森林浴コースの整備。



✓ ソフト整備

登山やクラフト、ヨガ、山の暮らしに親しんできた坊平の人々の魅力を活かした体験コンテンツ、医療機関と連携したヘルスプログラムを具体化。

企業連携のきっかけ

- 健康経営優良法人に向けたアンケートの送付
- 企業訪問(官民で訪問) ●モニターツアー、企業交流会の実施

プログラム提供の流れ(コーディネーターの動き)

- STEP 01 企業ニーズのヒアリング >> 目的、研修内容、予算感、企業担当者の思いなどを丁寧に確認
- STEP 02 プログラムの企画、事前調整 >> 企業の目的に応じてプログラムを組み合わせ、適切なガイドや滞在を手配する
- STEP 03 プログラム実施 >> 天候や参加者の様子に応じたスケジュール管理
地域の人と参加者の自然な交流が生まれるような場づくり
- STEP 04 実施後 >> 企業担当者との情報共有

企業ニーズに応じたプログラム設計

◎どんなニーズが多いか

- 社員同士のコミュニケーションを深めたい
- 社員旅行ではない、意味のある時間を過ごしたい
- 健康経営優良法人を取得したもの、何をすればよいか分からない
- 新入社員や若手のメンタル不調を予防したい

◎それにどう応えたか

- 少人数制や班分けにより、自然な対話が生まれる場を設計
- ヨガや焚火、温泉などを組み合わせ、坊平ならではの非日常の時間で心身の回復を促進
- 身体を整える体験や、地域滞在などを通じ、健康への気づきと学びを促すプログラムを提案

サービスに活かされている地域資源



温泉、サウナ



ペンションオーナー自作の窯で参加者自身が焼くピザづくり

- 温泉、サウナ
- 坊平こだわりランチ(管理栄養士監修のもと地元事業者の提供する健康的な食事)
- 宿泊施設のペンションやロッジ など

REGION 02

森の灯す炎が、 組織と個人の活力を 再生する

— 余白の時間がひらく、未来の可能性 —



群馬県 長野原町

酪農や高原野菜の産地で、かつては薪炭の一大産地として栄え、牧草地や広葉樹林が多く残る地。別荘・コテージ文化のピークを過ぎ、現在は外部との継続的な関係づくりや木材の活用が地域の課題となっている。



《推進地域紹介シート》

提供している企業向け森のプログラム

- 宿泊型ミーティング施設 TAKIVIVA® での合宿
- 焚火を囲む「内省」と「対話」の時間
- 火おこしや炊飯を通じた協働の時間
- 森の循環や事業づくりを学ぶ事業説明 など



《焚火を囲む対話の時間》



《森の循環や事業づくりの学び》

実施主体

有限会社 きたもっく

自伐林業や薪製造、養蜂などの「地域資源活用事業」と、キャンプ場運営や場づくりを行う「フィールド事業」を展開し、6次産業化に取り組む『地域未来創造企業』。フィールド事業の一環として、企業向け合宿施設「TAKIVIVA®」を運営。

なぜ、森林空間利用の取組が始まったのか？

キャンプ場運営にとどまらないフィールド事業を模索する中、「火を囲み、協働し、対話することの価値を再認識。現代社会において、「余白のある時間」から生まれる気づきや関係性を体感できる場づくりを目指し、TAKIVIVA®の取組が始まった。

取組の最初の一步



ビジョンの設定

「目的をもった集団が活力を再生するための場づくり」



ハード整備

参加者の能动性を大切に、内省や対話が自然と生まれる場を目指して施設を設計。廃屋をリノベーションし、焚火を中心とした滞在空間を整えた。



ソフト整備

ファシリテーションで導くのではなく、参加者の主体性を尊重。ホスピタリティを大切にした関わり方をスタッフ間で統一。

企業連携のきっかけ

- (有)きたもっくの事業視察や見学のつながりから合宿利用に発展
- 初期は、TAKIVIVA®のコンセプトに共鳴する人事、組織系コミュニティの利用促進にフォーカス
- 体験の機会を設け、口コミでの広がりを活用

プログラム提供の流れ

- STEP 01 企業ニーズのヒアリング** 》 目的や背景の確認など
- STEP 02 プログラムの企画、事前調整** 》 企業の特性や課題感、滞在目的に応じて、事業説明の内容を設定必要に応じてプログラムを追加
- STEP 03 プログラム実施** 》 参加者の能动性を尊重した場づくり
スタッフは参加者とフラットな関係性を築く
- STEP 04 実施後** 》 滞在を通じて生まれた気づきや関係性を、次へとつなげる

企業ニーズに応じたプログラム設計

●どんなニーズが多いか

- 部署や立場を越えた関係性づくり・チームビルディング
- 日常から離れた環境での思考整理や内省、創造性の回復
- 地域創生を考えるための事業見学、視察

●それにどう応えたか

- 火を囲み、対話する体験を軸に、本音で深く語りあう、非日常の場を設計
- 浅間山の生命力を感じる自然環境で、五感を解放する空間を提供
- きたもっくの事業やビジョンを共有し、新たな視点を創出

サービスに活かされている地域資源



自社製造の薪



森の循環を目指す事業

- 地域の食材
- 浅間山や周囲の自然環境 など

REGION 03

伝統の価値を見つめ、 新しい文化を 切り開く

—自然と共に養う、健康・環境・地域の未来—



京都府 南丹市

京都市中心部から電車や車で約1時間の距離に位置する。市域は東京23区とほぼ同規模で、約88%を森林が占め、林業が主要産業の一つである。一方で、木材価格の低迷や担い手不足といった課題も抱えている。市の中心部には生活や行政の拠点があり、美山エリアには里山景観と伝統的な暮らしが今も息づいている。



《推進地域紹介シート》

提供している企業向け森のプログラム

- 「YOMOGI+」(体調管理アプリ)による体調チェック
- 「ことはじめ」プログラムの意味を学び、養生への納得感を高める時間
- 森林ヨガ・鍼灸施術・MTB
- 「ことむすび」体調変化を実感し、日常でのセルフケアへと結び直す時間
- 持続可能な山林運営や伝統建築の講話 など



《養生についての基礎講座》



《森の鍼灸院(施術)》

実施主体

明治国際医療大学 伊藤和憲教授

地域資源と養生を結びつける考え方を提唱し、南丹市ウェルネスプログラムをプロデュース。東洋医学の専門的知見をもとに体験の意味を伝え、参加者の理解と行動変容を導く講話を行う。

NPO法人 美山里山舎

伝統建築や木質バイオマスを軸に地域循環型の暮らしを実践・提案している。森林管理の現場主体として、研修の受け入れ業務全般や鍼灸施術、山林管理の講話などを提供している。

南丹市

京都府・南丹広域振興局と連携しながら、企業受け入れの窓口を担う。企業ニーズのヒアリングからプログラム設計の方向性整理までを行い、専門家や地域事業者の円滑な連携を支えている。

なぜ、森林空間利用の取組が始まったのか？

皆伐中心の林業が主流で、持続可能な山林活用が進んでいなかった当時、地方創生交付金を契機に「森林資源フル活用」を掲げた取組が始まった。森林作業道整備(高密度路網)による高付加価値の木材生産を基盤に、森林空間の活用やハード整備を推進。さらに明治国際医療大学と連携し、「養生」をテーマとしたストーリー性を取り入れることで、既存の文化や地域資源を活かした独自のサービス創出へとつながった。

取組の最初の一步



ソフト整備

「養生」や「地域に根付く文化」を取り入れたコンテンツづくりを進め、地元住民向けのイベントを開催。地域の文化や知恵を掘り起こし、さらに新たなサービス創出へとつながった。



ハード整備

森林作業道整備を基盤に、伝統建築を活かした拠点や森林フィールドを整え、活動の場となる環境づくりを進めた。

企業連携のきっかけ

- 京都府のウェルネス構想やDMO等による情報発信・紹介
- エビデンスに基づく営業活動
- 口コミ・評判の広がり

プログラム提供の流れ

- STEP 01 企業ニーズのヒアリング** 》 ヒアリング(場合により、アプリによる事前の体調チェックを社内で実施してもらい、結果を把握し、プログラム設計に反映)
- STEP 02 プログラムの企画、事前調整** 》 南丹市、美山里山舎とでプログラムを設計・手配(季節、人数、希望等に合わせて)
- STEP 03 プログラム実施** 》 アプリによる体調チェックを行い、体質タイプに合わせたプログラムを中心に実施
- STEP 04 実施後** 》 再度アプリによる体調チェックを行い、実施前との変化を測定アンケートを実施し、サービスへのフィードバックを次へ活かす

企業ニーズに応じたプログラム設計

◎どんなニーズが多いか

- 健康経営について、制度対応にとどまらず、社員が実感できる取組、実施効果の見える取組を行いたい
- 生産性向上・チームビルディングへの期待
- 地域、森林、木材に関わる事業について知見を広げたい

◎それにどう応えたか

- 体調チェックや「ことはじめ」「ことむすび」を通じて、体験の効果を実感すると共に、日常の行動変容にもつなげるプログラム設計
- 「養生」を軸に、森という非日常の環境で心身を整える時間と、社員同士の共通体験による関係性づくりの時間を提供
- 持続的な山林運営実践者からのリアルな学びの場が、参加者一人ひとりの視点や考え方の転換に寄与

サービスに活かされている地域資源



ぼたん鍋(地元産のジビエ料理)



伝統建築工法の見学

- 地産地消のお料理、京野菜
- 温泉
- 自然素材の養生茶
- 薪ストーブ など

REGION 04

林業を基盤に、現場から 森の価値を問い続ける 西栗倉

—山林のリアルに触れ、学びを深める体験プログラム—



岡山県 西栗倉村

村域の約90%が森林であり、その約80%を人工林が占める。1960~70年代に造成されたスギ・ヒノキ林が広がり、現在は間伐や再造林といった森林施業の真っ只中にある。平成の大合併を経て「自立」を掲げ、自治体として「どう生き残るか」を考え続けてきた村である。



《推進地域紹介シート》

提供している企業向け森のプログラム

- 林業作業体験・施業地・製材所見学
- 森林整備学習・チェーンソーでの伐倒体験
- ロゲイニング など



《林業施業地・製材所見学》



《森林整備学習・チェーンソーでの伐倒体験》

実施主体

株式会社 百森

西栗倉村の掲げる「村内で木材生産を軸とした経済を回し、雇用や人口増加を目指す取組“百年の森林(もり)構想”」を背景に設立された森林・林業ベンチャー企業。行政から委託を受ける山林管理事業に加え、近年は森林活用事業を展開している。

なぜ、森林空間利用の取組が始まったのか？

森林空間活用によって新たな収益や関係人口を生み、独自の山林事業価値を創出することで、地域の森林づくりと経済活動の両立を目指し取組を開始。林業以外の業界とも関わりながら、森林と人との新たな接点づくりや事業展開に挑戦している。

取組の最初の一步



ソフト整備

事業担当者として地域おこし協力隊を採用し、補助金等を活用しながら新規プログラムの創出を開始。



ハード整備

施業地(社有林)をプログラムに活用する上で、アクセス面、トイレの位置などを整理。

企業連携のきっかけ

- 村内の企業研修運営企業からの紹介
- 村からの視察対応依頼
- イベント等での営業

プログラム提供の流れ(コーディネーターの動き)

- STEP 01 企業ニーズのヒアリング** 》 研修目的や課題感、企業が森林に関心を持った背景を確認
事前アンケートで林業への理解度や環境施策への理解度を測定
- STEP 02 プログラムの企画、事前調整** 》 西栗倉村独自の文脈(林業や地域風土)に沿って、研修目的と内容を個別設計
林業作業・アクティビティ・滞在などを調整
- STEP 03 プログラム実施** 》 当日の運営、場づくりを担当
- STEP 04 実施後** 》 事後アンケートで、プログラム実施前との理解度や気づきの変化を測定
研修中の質疑内容の記録と合わせて、アンケート結果を企業へ共有
企業担当者とのコミュニケーションをとり、次回研修や関係構築につなげる

企業ニーズに応じたプログラム設計

●どんなニーズが多いか

- SDGsやサプライチェーンに関する理解促進
- 経営層と現場の環境意識ギャップの解消
- チャレンジ精神の醸成やコミュニケーション能力の向上

●それにどう応えたか

- 実際に木を切り、運び、使う現場を体感し、林業現場や、自社事業、サプライチェーンへの理解を深める
- 森林空間でのロゲイニングやチェーンソー学習など、緊張感・達成感を伴うプログラムでチャレンジ精神やコミュニケーション力を高める機会を提供

サービスに活かされている地域資源



高い人工林率と施業の現場



村の住民による多様な関わり

- あわくら会館(村産材97%使用の施設)
- 村内製材所、林業事業者
- 移住者・若手人材との交流
- 丁寧に調理されたジビエ料理 など

REGION 05

地域の森を "都会の縁側"に

—産業医と連携し、働く人に寄り添う森林セラピー®—



広島県 安芸太田町

町域の約88%を森林が占め、国有林・県有林・町有林・民有林が混在する中山間地域である。奥山から里山、渓谷、ダム湖まで、多様な自然環境がコンパクトに集積している一方で、人口減少や林業の担い手不足、観光活性化の必要性が問われている



《推進地域紹介シート》

提供している企業向け森のプログラム

- 森林セラピー® ●森林セラピーヨガ ●BBQ、薪割、焚火 ●地域の観光資源の見学 など



《森林セラピーヨガ》



《森林セラピー®》

実施主体

一般社団法人 地域商社あきおた

安芸太田町の地域資源やサービスと、お客様とをつなげる「商社」「DMO」「道の駅」の総合機能として地域支援事業や体験コンテンツの受け入れを行う。

安芸太田町

「安芸太田町ヘルスツーリズム推進協議会」を通して、森林空間利用の推進を行う。協議会と連携しながら、方針策定や予算補助、森林整備などの基盤づくりを担っている。

なぜ、森林空間利用の取組が始まったのか？

安芸太田町では、森林は長らく林業や観光の場とされてきたが、担い手不足や季節・場所に偏る課題もあった。こうした中、森林を“使い切る”のではなく、“関わり続けてもらう場所”として捉え直し、都市部の人々との新たな関係づくりを目指したことが出発点である。

取組の最初の一步



✓ ビジョンの設定

「健康づくり・幸せづくり」を軸に、森を地域資源として活かす方向性を定め、行政、有識者、地域関係者による「安芸太田町ヘルスツーリズム推進協議会」を立ち上げた。



✓ ハード整備

森林セラピー基地の認定取得（エビデンス調査等）
セラピーロードの整備（国・県補助金や森林環境費と税を活用）



✓ ソフト整備

里山ガイド養成など人材育成を段階的に実施

企業連携のきっかけ

- 産業医研修の受け入れ、産業医からの紹介 ●全国健康保険協会、健康保険組合連合会への営業
- 健康経営優良法人の認定を取得した企業への営業

プログラム提供の流れ（コーディネーターの動き）

- STEP 01 企業ニーズのヒアリング >> 企業の目的や希望を丁寧に聞き取る
- STEP 02 プログラムの企画、事前調整 >> 森林環境、ガイドの専門性、移動距離等を踏まえ、内容を個別に組み立てる
下見、ガイド、施設手配、備品準備を実施
- STEP 03 プログラム実施 >> ガイドが現場を主導
事務局は全体をサポートしながら、参加者の様子に気を配る
- STEP 04 実施後 >> 参加者アンケート、企業担当者や産業医へのヒアリング、
ガイド報告書によるフィードバックを次回につなげる

企業ニーズに応じたプログラム設計

◎どんなニーズが多いか

- メンタルヘルスに対する具体的な取組を探している
- リフレッシュや気分転換の時間を確保したい
- 社員同士のコミュニケーションを促進したい

◎それにどう応えたか

- 森林セラピーガイドによるセルフチェックやヒアリングで、自身の心身の変化に気づききっかけを提供
- 呼吸法や自然環境でのゆったりとした時間を通じて緊張や疲労を和らげ、リフレッシュの時間を提供
- 少人数で森を歩き、振り返りの時間を設けることで、新人研修の一環として社内コミュニケーションの向上に寄与

サービスに活かされている地域資源



温井ダム



特産品（祇園坊柿）

- 温井ダム（アーチ式ダムとして日本最大級の高さ）や名勝吉水園（眺望が楽しめる回遊式庭園）などの見学
- 特産品（祇園坊柿、米粉クッキー） ●学術連携（大学による森林浴効果の科学的検証）

各地域の事例から見えてきた、 森のプログラムづくりの考え方

Q1 完璧なプログラムがなければ、企業とつながれないのでしょうか？

A1

多くの地域では、「完成したプログラムを売る」のではなく、**軸となるサービスを土台に、企業とつながりながら共にプログラムをつくりあげています。**
その共通点は、「丁寧なヒアリング」「地域資源を活かしたサービスの造成」「柔軟なプログラム設計」です。

3つの共通点

丁寧なヒアリング

企業の担当者に寄り添い、背景や目的などを理解することが出発点。

- ・なぜ今、研修を行うのか？
- ・社員にどんな変化を期待しているのか？
- ・なぜ森林に関心を持ったのか など

柔軟なプログラム設計

メインのニーズに加え、「どんな時間にしたいか」という希望に応じて内容を調整。

リフレッシュ、関係性づくり、地域学習など、目的に応じて内容や滞在スケジュールを柔軟にカスタマイズしていきます。

地域資源を活かしたサービスの造成

地域資源を捉え直し、強みを掘り下げる。

- ・森の特徴(種類・状態・管理状況)
- ・人の力(知識・技術・経験)
- ・周辺資源(食・温泉・文化・教育)
- ・既存の活動(観光、林業、教育、福祉) など

地域資源を「俯瞰」してみる。

- ・「点をつなぎ、面にする」
- ・エリアマネジメントの視点
- ・外部組織との連携など

→この地域ではどんなコンセプト・ストーリーが生み出せるだろうか？

Q2 費用対効果の説明や社内決裁がハードルになるのではないのでしょうか？

A2

ポイントは「**企業に求められる場づくり**」と「**目的や効果の言語化**」です。

企業に求められる場づくり

単なる体験提供ではなく、体験の“質”を設計する。

- ・受動的な研修ではなく、参加者が主体的に関わる時間
- ・役割や立場がフラットになる空気
- ・地域との関係性が、自然に生まれる場
- ・自分自身を振り返る内省の時間 など

ファシリテーションや空間設計の工夫が重要です。

目的や効果の言語化

研修の価値を言葉で整理することが、企業連携の第一歩。

- ・どんなプログラムか
- ・どんな課題やニーズに応えるのか
- ・何を目指し、どんな効果が期待できるのか
- ・実際、参加者にどんな変化をもたらしているのか

地域側が「なぜそれを行うのか」を語れることが大切です。



地域から始まる、森業

「決まった型はない。だからこそ、地域からつくることができる」

森林空間利用には、決まった型はありません。

地域にある資源を組み合わせ、複合的に価値を生み出します。

だからこそ、地域ごとに姿が違っていいのです。

地域の森も、人も、課題も異なります。

大切なのは、事例をなぞることではなく、

自分たちの地域を、どう見つめ、どうしたいかを言葉にすること。



企業が求めている
「どんな時間にしたいか」

地域が提供できる
「どんな時間をつくれるか」

価値を共につくる

森林という、私たちの暮らしを支えている、魅力あふれる空間

その価値を社会にひらいていくのは、

自然と共に暮らす地域と、

森林から離れた分野で活動する多様な主体との出会いです。

地域に根づく自然や人の想い、現代社会で本来必要とされている時間を見つめなおし、

自然と人をつなぎ直す取組こそ、森業の真髄です。

その先には、日本が世界に誇る豊かな森を社会と結びつけ、

未来へとつないでいく道が続いています。



次の一歩のために

企業との連携や、事業としての成立を見据え、

「誰を対象とするのか」「何から始めるのか」「どうサービスを磨いていくのか」を

考える際には、森業のネットワークもご活用ください。

各種支援事業やイベント情報など、最新情報は裏面へ

今後の取組に向けた情報

これからの森業のポータルサイト

森業 portal

森林と人、森林と企業がつながっていく 情報発信ポータル「森業portal」

林野庁では、木材供給にとどまらない森林の多面的な機能に価値を見出し、より多くの人々が森林に携わる取組を新たに「森業」として推進しています。都市と地方の連携や、これまで農林水産分野と関わりの少なかった企業等との共創により、森林空間の価値を最大限に引き出し、地域経済に新たな恩恵をもたらす挑戦です。

森業portal

検索



https://www.rinya.maff.go.jp/j/sin_riyou/morigyo.html

林野庁

【お問い合わせ先】

林野庁 森林利用課 山村振興・緑化推進室 山村振興企画班

TEL:03-3502-0048 E-mail:forest_style@maff.go.jp

[発行元] 林野庁 [発行日] 2026年2月 [編集] 株式会社さとゆめ [デザイン・制作] 株式会社キュー

[本冊子は、(株)さとゆめ・(公社)国土緑化推進機構・(株)HISが受託した令和7年度林野庁「森林コンテンツ育成・普及対策事業」の一環として発行します。]

※掲載の情報は2026年2月現在のものです

※本冊子掲載のイラスト・図・写真の無断複製・転載・2次利用をお断りします